

役人の不正の範囲は次第に広がり、享保年間には神主印を無断使用して御蔵島にツゲの山を借金の抵当にするという事件まで起こった。

度重なる不祥事と苦しい生活に御蔵島島民が三宅島からの独立を決意したのは十八世紀の初めである。たまたま正徳三年（一七一三）、江島生島事件に連座して御蔵島に遠島処分になっていた江戸城大奥の典医・奥山交竹院は、神官加藤藏人を中心とする独立運動に同情し、友人の幕府典医・桂川甫筑に島民の苦しい実情を訴えた。

この時、甫筑は年寄（休職中）の身であったが熱心に幕閣に働きかけた。その結果、享保十年、島民の悲願は達成され、ツゲ材は直接に送られるようになった。交竹院はこの喜びの日を見ることなく、享保四年、世を去った。

島民はのちに奥山、桂川、加藤の三人を神社に祀り、その功績を称えた。三人を祀った三宝神社は、御蔵島の総鎮守稲根神社の境内地にある。

以来島民は境内内に生えた葎など島の産物を毎年江戸の桂川邸に送り、一方桂川家からは医薬品を島に贈り、両者の交流は明治期まで続いた。

（日本歯科大学）

原沢文伸『青洲先生聞書』と伊藤震山『春林軒随筆』による華岡青洲乳癌手術記録の再検討

蒲原 宏

華岡青洲の乳癌手術症例は『乳岩治験録』その他の記録によっても、初診から手術終了までの経過が詳細に記録されているのは、第一例の大和宇智郡五條駅、藍屋利兵衛の母勘六十歳以下五名にすぎない。『乳岩姓名録』にある乳岩手術後の再発手術例は五名であるが、それら手術例の予後の不明のものが多くことは、すでに「華岡青洲の乳癌手術についての医史学的検討」（ガンセンター新潟病院医誌七巻二号九一〜九四頁昭和四十二年）で報告してある。

青洲自身による手術例の詳細な記録と予後調査は少ないので、華岡春林軒塾に学んだ医師の在塾中の見聞録にある乳癌手術症例の記事は貴重な傍証資料と考え追加報告とす

る。

文化十一年(一八一四)二月二十五日入門の原沢文仲(江戸・亀井町住・下野国上野田村出身)の在塾中筆録した『青洲先生聞書』(三九丁)と越後東蒲原郡豊実村出身伊藤震山(門人録に記載なし)が文政十三年(一八三〇)三月から九月九日までの在塾中の見聞を筆録した『春林軒隨筆』(三五丁)に記録されている、青洲の乳癌手術症例を報告し、『乳岩姓名録』記事だけでは明確でない、腫瘍の大きさ、予後、病状経過を補足して前記論文に追加報告をしたい。

(一) 『青洲先生聞書』

原沢文仲(上州)

(1) 淡洲須本村浅田弥太兵衛妻(乳岩姓名録では、淡州浪本浅田弥太兵衛内とある)

「戊八月(文化十一年)治シ又発。亥ノ二月(文化十二年)来、三月六日縫、繧花肉ハ核ヲ切抜段々サクリ出シタレハ遂ニ皆抜去タリ、因テ皮不足シタリ。左右ヨリ引寄縫シ、故四五日ニシテ縫目切穴明タリ、夫レカ還テ能キカト思ハル。又乳首ノ下ニ小核有リ(畧図)如此也。毎日自ラ指ニテ撫タリ、膏ハ大玄ヲ縫シ上ヘモ下ノ核ノ

所ヘモ毎度付替ノ度ニ打シニ後三十日斗ニシテ乳首下ノ核消テ甚見事ニ平癒セリ。此婦氣強勇且腋下ニ核ナキ故カ先生モ初断リシガ夫婦共ニ強テ治療請シ事ナリ、思ノ外早ク且見事ニ癒タリ、此老女ハ八日目ニ至テ熱出且大膿ヲナス、因テ越婢加朮附ニ転ス、是則破傷湿也、此湯五六貼ニテ甚有効、見症乳ノ廻リ赤色ヲナシ腋下亦同色左手腫氣生是則破傷湿ノ症ニテ越朮附ノ正症也、金創并ニ諸症共如此症出ハ全ク外誘ノ症皆此湯主之。△又右ノ症ニ依テ粉レ易キ物有則纏腰丹也。此ハ如此水泡ノ形ニテ赤色ヲ帯ルモノ也。此症は荊防敗毒ノ付所也。乳癌療中発シ易キ症也。能可謹之。右先生伝 △此老姥初ノ変症ハ越婢加朮陽ニテ甚有効已ニ步行自由ナリシ故時々隣家杯ヘ行折節寒暖不時ニ逢テ又外襲セラレ熱出且虻虫アリ虫ヲトス事七八頭、種々転方スレ共無効遂ニ死ス。」

乳癌手術について

「麻薬服スル事貳匁。無効。又三日ヲ過テ貳匁無効カ如クナレ共、其人頻ニ望治療有効者ノマネシテ受治。即コロンメスニテ切ル事貳寸余核出ル事拾壹匁焼酎ニテ洗縫事六針、ハルサンヲヘラニテ付(縫タル裏ヘラニテ付

ル也) 卵綿ヲ打、酢綿シ卷綿シ置。是ヨリ三黄湯ヲ与フ。(療治前葛根湯加桔梗石膏△刑敗△縫(テ後三黄△清肝解鬱△清解加樺石) 老婦直ニ麻葉ヲ服、二時斗シテ切核六匁五分。

即焼酎ニテ洗縫、ハルサンヲ付無名異卵ニテトキ塗ニ番ヲ蓋膏トス。」

と記し、更に

「淡州乳岩附録 肩ニ塊有所へ針シテ左突メイチャニ輕キ腐葉ヲ塗サン遊エキ遊エキ蓋膏少シノ膿ハ出タリ。此モ切ル前暫致シタレ共ロクロク効モナケレ共少シ助ケニモ成リタルカ」

と附記する。

(2) 乳岩、和州宇陀町之内黒木屋清兵衛妻(乳岩姓名録では和州宇田萬町黒木屋清七妻とある) 四十四歳去ル申ノ八月(文化九年) 右乳房ノ上小

核ヲ生テ諸医雜方兼施セトモ無効、或医灸之事数千無効ノミナラス其核表皮ニ引付且色ツク、戊五月(文化十一年) 来テ治ヲ乞、先生曰不灸ハ皮ニ付事ナクシテ治療施シ易シト云、又右ノ首根ニ小核三ツ有リ、是ハ癰ナリト云、又右ノ腋下ニ小核アリ、乳岩ノ証ト癰トハ同毒ノ種ナリト云。即仙方散聚湯ヲ夏枯中ラン引汁ニテ煎服サセ

ル事三四日ニシテ六月二日、土用四日ニ入也。麻沸ヲ貳匁五分煎服サス、朝五ツ時四ツ半頃能瞑眩ス。即コロンメスヲ以サク事四寸斗リ、キリイル大ニアリ、其下ノ核兎角皮ニ引付テ離レ難シ。メスニテ切り廻シ切り廻シ取出セリ。其後乳頭ノ方ヘヨリ小骨ノ如キ物指ニサハル。

先生指ヲ入レ見レハ肋骨ノ間ヘ根入タリ。指ニテ引上ケメスニテ切り出ス。剛キ事石ノ如シ。其外大豆小豆大ノ核六七有皆指ニテ切り、或ハメスニテ切取タリ。核ノ重サ二十六匁ナリ。メスニテ割テ見レハ、中赤白ト云。内種々ノ変色アリ。即白キ所ハコンニヤクヲ少シサラセシ物ノ如ク而モ剛也。赤キ所斑ニアリ切口ニ灸ヲシ効ニ灸痕還テカタクナリタリ。(略図あり) 即焼酎ニテ能洗ヒ(略図あり) イロハニホト縫タリ。縫終テハルサンヲヘラニテ縫目ニ付、卵木綿二重酢木綿二重ハリ、其上卷木綿ス」とある。二症例は『乳岩姓名録』と記述に若干の差がある。第一例は術後七カ月で再発、肺転移様症状で死亡。第二例は腫瘍発見一年十カ月後の施術、他医の誤療、麻酔経過、手術術式、腫瘍所見、重量、個数、創傷処置が詳細に記されている。華岡塾での最終記録なので予後は不明であ

るが、『乳岩姓名録』を補足している。

(一) 『春林軒隨筆』

伊藤震山(越後)

「尾州津島医妻 乳岩截断 三十余岩重六匁余」文政十

三年三月二日の松原定碩の妻(行年三十四核量九錢五厘)

と『乳岩姓名録』にある。以上の症例を加え既報告の再

検討を行った。

(新潟大学)

『及彼』(豚解剖書)の研究について

末田 尚

緒言

本書は、故石原明氏が「日本解剖集成」で本文のみ発見、その獨創性を紹介された。また杉立義一氏も「京都の医学」で言及されたが、序、例言、跋、附図を缺いてその全容は不明であった。吾等は郡医師会史料調査中に、当郡加計町井上堯氏の蔵書中に「及彼」の完本を発見、その検討をしたので報告する。

(一) 「及彼」井上本の内容

井上本は「及彼完」「及彼図」の二冊よりなり、前者は二三・五一八種卅二枚、後者は二四・二×一八種十九枚の和紙袋綴の彩色筆写本である。時間制限のため、石原本に